

氏名（本籍）	Pieter VAN LOMMEL
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 乙 第 2989 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	明治後期における日本文学と教育との関係―「田舎教師」の時代―

主	査	筑波大学 教授	博士（文学）	青柳 悦子
副	査	筑波大学 教授	博士（学術）	加藤 百合
副	査	筑波大学 准教授	博士（文学）	齋藤 一
副	査	筑波大学 准教授	博士（文学）	馬場 美佳

論文の要旨

本研究は、日本において近代教育が発展した明治後期における文学と教育との密接かつ複雑な関係を、地方の小学校教員という新しく出現した読者層に着目しながら、これまで研究材料とされることのほとんどなかった資料をもとに、照らし出す試みである。

本論文は、序章に続いて大きく三部から成り、結章までを含めて全 16 章によって構成される。

序章である第 1 章では、本論文の問題設定を提示する。まず、これまで教育史研究と文学史研究が独立しておこなわれてきたことを指摘する。そのうえで、明治半ばに出現した多数の小学校教員が近代的な新たな読者層を成したことに着目し、これらの教員読者層向けに出版された数多くの教育雑誌や「教育小説」と呼ばれる文学作品に注目した研究をおこなう必要性について述べる。

第一部「小学校教員と教育」では、明治期における教育について改めて時代区分を提示し、教育現場の実態の変遷と、教育ジャーナリズムの展開を段階的に論ずる。まず第 2 章で、教育制度の拡充や各種教育令、教育への施策などをふまえ、明治維新から明治 20 年代まで、教育が急拡大した明治 30 年代、日露戦争後の明治 40 年代という 3 つの時代区分を立てて、日本の近代教育が明治初期の個人主義や自由主義、実学主義から、短期間の内に国家主義へと転じていく諸段階を実証的に跡付ける。学制の展開や教育に関する法令の変遷、主要な教育論、社会で喧伝された価値観やイデオロギーと教育との関係を詳細に検証するとともに、明治後期における教育ジャーナリズムの隆盛とそこにおいて文学が果たした役割に着目する。第 3 章では、とくに明治 30 年代以降大量に出現した日本全国の小学校教員、とくに地方教員の実情を、制度面、生活面、また文学的志向の面から具体的に明らかにする。小学校教員となる者の多くは高等教育への進学を果たせなかった中間知識人層を成し、つねに挫折感と社会的昇進（「立身出世」ないし「立志」と呼ばれていた）への渴望を抱えていたこと、また、出版物ことに文学の熱心な読み手であったことを検証する。

第二部では、「教育小説」という文学ジャンルについて、6 つの章にわたって具体的な検討をおこなう。まず第 4 章でこの論文における「教育小説」の定義を、主として教員を読み手として想定した小説と明示したあと、時代区分と媒体によって、その具体的な様相を検証していく。

第5章では明治20年代に現われた、みずから「教育小説」と銘打つ単行本の小説群について論じる。近代教育の理念と重要性をこどもとその親に唱道する目的で作られた家庭向けのこれらの作品が、立志の理想を語り、女性教育の必要性や児童中心主義的な立場を唱える自由主義的色彩の濃いものであったこと、その一方で、こうした傾向と矛盾することなく国家の防衛と発展の強化を謳うものであったことを論じる。

第6章、第7章、第8章では、明治30年代に創刊された代表的な教育雑誌『教育界』、『教育学術界』、『教育実験界』をそれぞれ対象として、各雑誌の特質と、そこに掲載された短編小説についての分析をおこなう。『教育界』は民主主義的で開明的な精神の称揚を編集の方針とした雑誌で、地方教員が自分の価値と役割を探ることのできる場として機能したことを分析する。また、そこに掲載された総計23編の短編小説を検討し、純真な児童や献身的な教師など教育の理想像を提示する作品も多いが、国木田独歩や永井荷風など現在でも評価の高い作家たちによるものもあり、全般に文学的な深みを持ちながら教育の問題点を探る作品が目立つことを分析する。『教育学術界』は学術研究や中等程度以上の教育を内容の中心とした雑誌で、知的なエリートの世界と小学校教員とのつながりを可能にした。明治末までにそこに掲載された50作にのぼる小説は、日露戦争前には地方教員の上京や立身出世を促す内容、日露戦争後は地方での奉職を賛美し教職を神聖化する傾向をもったことを明らかにする。『教育実験界』は小学校教員と教育の現場を実用的に支えることを目的とした雑誌で、日露戦後を中心としてそこに掲載された160作におよぶ投稿作品は教育美談に類するものが多くを占めるものの、多様な傾向が維持されたことを検証する。

第9章では、明治40年代に出版された単行本の教育小説群をとりあげ、それが当時の教育政策に即応した国家主義的な側面を強くもち、プロパガンダ的な作品と位置づけ得ることを論じる。

第三部は、自然主義文学と教育との関係を、田山花袋の文学の活動に焦点を当てることで掘り下げる。日露戦争後に隆盛した自然主義文学が当局から激しい敵視を受けたことを重視してその理由を分析し、社会分析と社会批判という役割を担ったことを自然主義文学の中核的な特質として抽出する。こうした作業を通じて、従来、保守的で内閉的な文学とみなされてきた自然主義文学の理解そのものを刷新し、その社会的意義を明確化することを研究目的として提示する。以上の問題提起を第10章でおこなった後、第11章以降で、この目的を遂行するために、自然主義文学の主導者であり教導者でもあった作家田山花袋についての研究を展開する。第11章では先行研究の偏りを指摘し、本論文が依拠し得る、自然主義文学をめぐる新たな解釈を、とりわけ英語圏の研究から抽出する。第12章では、花袋自身が地方文学青年からロマン主義を経て、あらゆる理想や先入観から距離をとる自然主義作家へと変遷した過程を跡付ける。第13章では、雑誌『中学世界』や、とくにみずから創刊した文学投稿雑誌『文章世界』で、きわめて熱心に地方の青年たち（教員も多く含まれる）に対して自然主義的な批判意識を教導し、そのための文学作法を指導していたことを掘り起こし、それ自体が一種の社会的教育活動であったことを強調する。そのうえで第14章では花袋の代表作でもある長編小説『田舎教師』をとりあげ、この作品がまさに地方の小学校教師である青年を主人公にしつつ、多くの教育小説における教育賛美の傾向とは相違して、むくわれない立志の夢や道徳的とはいえない性欲のあり方、教員の貧困生活や、教育現場で露呈する教育政策の矛盾などを描き出した、徹底して相対的な視線を読者に促す作品であることを論じる。第15章では花袋のこうした自然主義が、実際に地方青年であった片岡鉄平や江馬修を鼓舞し、文学者としての道を彼らに切り拓いたことを指摘する。

結章では、本論文を振り返り、教育と文学のかかわりを見据え、実証的な研究方法を重視した本研究が達成し得た学術的貢献について考察する。

審査の要旨

1 批評

本論文は、近代文学と近代教育が共に急成長を遂げた明治後期を研究の対象時期に据え、文学と教育との密接な関係のありかたを、その背景となる社会状況とともに浮かび上がらせることに成功した貴重な研究である。地方の小学校教員と文学とのかかわりに焦点を据えることで、文学の社会的意義を見つめ直し、明治後期における近代文学の発展過程を新たに照らし出すことができた。この浩瀚な研究の成果は数多い。

第一に、これまで文学研究においても教育研究においても十分には検討されることのなかった、教育雑誌掲載の小説群を、『教育界』『教育学術界』『教育実験界』という中心的な三誌に限って、網羅的に検討したことがあげられる。教員を読者とし、しばしば教員自身によって書かれたこれらの短編作品をまとめたかたちで研究することにより、これまで知られることのなかった大きな文学運動が描出され、近代文学の発生・興隆期に重要な役割を果たした一つのジャンルとして「教育小説」が提示された。

第二に、こうして照らし出された明治後期の「教育小説」という枠組みのなかで、どのような変遷が見られるのかを時間軸に沿って検証した点があげられる。この作業によって、公教育が普及する前の明治20年代や日露戦争後の明治40年代に刊行された単行本の「教育小説」群の存在にも光が当てられ、その特質が明確化された。雑誌掲載の短編作品については、忠君愛国の国家主義に追随した小説という従来の一面的な見方を覆し、日露戦争前には自由主義的な傾向を含む多様な姿勢が打ち出される媒体であったこと、また日露戦争後も一定程度、社会批判的な傾向やロマン主義的な傾向など忠君愛国とは異なる姿勢も維持されたことを、実証的に明らかにすることができた。

第三に、自然主義文学の唱道者として田山花袋に注目し、とくに投稿雑誌を通じた地方青年に対する熱心な文学指南の実際を検討して花袋の文学観を抽出し、それに基づいて『田舎教師』を読み直したことで、この作品の複雑な試みを掘り下げることができた点がある。ここから自然主義文学の本質とその代表作家としての花袋について従来の見方に修正を迫り、あらゆる理想に疑問の目を向け冷静な社会観察から批判的に人間を見つめる文学思潮を徹底していこうとした自然主義文学の実態を捉え直すことができた。

その他にも、地方教員の実生活を雑誌投稿での家計報告などを通じて照射したこと、雑誌に掲載された翻訳小説の典拠をすべてつきとめたこと、掲載作品に対する地方教員たちによる読後評を投稿欄から抽出して一種の文学コミュニティの形成状態を明らかにしたことなど、本論文の功績は多岐に及ぶ。

本論文での自然主義の捉え直しが花袋文学の全体および花袋以外の自然主義文学にも有効であるのかなどについては一層の議論が求められるところではあるが、緻密な検証作業に基づいて説得力に富む論究を展開した本論文が、今後、明治後期の文学と教育を論じる際の必須参照文献となることは間違いない。

2 最終試験

令和3年1月19日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(1)に該当することから免除した。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。